

世界の終わりと君の終わりが始まる時に



昼近くになつてから起きた怠惰な朝。朝昼兼用で用意したのは卵二つとベーコン、サラダを添えてパンを齧る。テレビをつけると二十年に一度の神子の交代のニュースばかりだ。私がこの日を忘れるはずがない。だが、テレビはすぐに消してしまつた。見る必要はない。

この歳まで嫁の来手もなく、ひとりて生きてきた。だから、この家は郊外にあるのも手伝つて、テレビやラジオを消してしまえば酷く静かだ。

その中で思うのはここまで長かつたという感慨だけだ。それでも生きてきたのはそれがあの子の願いだからだ。ふと視線をやるのは白い封筒。あの日もらつたたつた一通の手紙だ。

さあ、食べ終えたら彼女の元へと行こう。やつと、これでやつと会えるのだから。

\*\*\*

ふらりと買い物に出た帰り道、私は行き倒れた青年に出会つた。慌てて家に運び入れたが、こんな国の郊外に人がいた事より、彼の色彩に驚いた。

この国の人間は色を持たない者がほとんどだ。白髪に黒目というのが一般的。富裕層には多少『色持ち』というのがある事にはいるが、それも少し色味がかつてる程度だ。

それなのに、彼の髪は鮮烈な赤色。目が眩みそうな程鮮やかに咲き誇っている。

ベッドに横たわる彼に見惚れていると、ぼんやりと彼が目を見ました。

「ここは……？」

「ああ、気が付いたかい？　ここは私の家だよ。行き倒れていた君を見つけて運び込んだんだ。君の名は？　どこから来たんだい？　どうしてこんな郊外にいたのかも聞きたいかな」

「……名前……？　僕……」

彼はどうやら記憶喪失のようだった。

私は彼を仮にフロックスと呼ぶ事にした。フロックスは記憶喪失の為、常識がズレている事もあったが、教えればなんなく飲み込んだ。我が家で療養する事を勧め、彼も受け入れたが、それだけでは暇だろうと手慰みに絵と文字を教えた。

すると、彼は貪欲に本を読み漁り、木炭を手に躍動的で見事な絵を描いた。

私は画家だから、フロックスの絵を見て嬉しくなった。彼にはこの世界がこんなに素晴らしいものに見えていくのか。

彼の屈託のない笑顔と彼の生き生きとした絵を見ているとインスピレーションが湧き、私の筆もどんどん進み、次々と鮮やかな緋色を用いた絵を描き上げることができた。

彼がわたしの絵を描きたいと言った時には一も二もなく了承した。理由を聞けば夜の様な漆黒の髪が素敵だからだと。見た事のない綺麗な色を残しておきたいと思ったんだという。無彩色とはいえ、白やシルバーアッシュの髪色がほとんどの中、闇のような黒髪は珍しい。色付きがもてはやされる中、異彩を放つ黒は受け入れられず、魔性の子と呼ばれた事もある。両親からは愛されて育ったが、その分負担もかけていたのか、早くに逝ってしまった。そんな良くない色の事を素敵だと褒めてくれた鮮やかな彼に嬉しくなった。それが記憶喪失故の常識のなさだとわかってはいても。

私が画家を目指したのは異端の色合いが由来する。黒色に塗りつぶされた私だからこそ鮮やかな色を扱う画家になったのだ。

幸い才能はあったらしく、生活には困っていない。決して顔を出さない覆面画家として生きていけば、だれにも会わないのは流石に無理でも、交流は制限する事ができる。今思えば、フロックスと二人であんなに長く過ごせたのはそのせいもあったのだろう。

そんなある日、フロックスが来て二週間程が経った頃だったろうか。何も無い所で派手に転倒して驚いた。聞くと彼はいつからか脚にうまく力が入らないのだという。確かに彼の体はあまり筋肉もついていなくて、こう言つてはなんだが頼りない。体が弱くて体力もないので日がな一日家に籠りきりで過ごしている。そういえば、家の中でも同じ場所に座つてばかりで、あまり歩き回つたりはしていなかったことに気付く。それでも、生活にそんなには支障がないんだと笑う彼に、心がつきんと痛んだ。

無理をしないように言い含め、それから彼の行動に気を留めるようになった。そして、よく見ていたからか、ふと、彼の赤色が出会つた頃より褪せている様な気がした。

フロックスが家に来たばかりの時、絵を描かせてもらった事がある。彼の鮮やかな色を表現するには苦勞して、本人の鮮やかさには劣るものの、なんとか絵に留める事ができた。その時の絵と比べても今のフロックスの方が色褪せている。何故だ？ そう思うのも束の間、その数日後、彼はベッドから起き上がれなくなつてしまつたのだ。

医者にも診せ、思いつく限りの看病はした。だが、フロックスの容態は良くならなかった。不安と危機感の募る中、私は甘い物が好きな彼の為に蜂蜜を買いに走つた。

決して安い物ではないが、彼の為ならば買う事に迷いはなかった。幸いにもあと一枚絵を描き上げればお金は入る。間に合わなければ、自分の食事なりを切り詰めればよい。

そんな事を考えながら急ぎ足で帰つた私を出迎えたのは、フロックスではなく、ものものしい騎士達と高位神官だつた。

彼らは神子の保護の礼と共に引き取りに来たと話す。フロックスは一週間後に交代を控えた神子だつたのだ。

私はしぶしぶフロックスと神官たちを対面させる事にした。いつの間にか、私は彼と離れがたく思う様になっていたのだ。

「神子さま、お迎えにあがりました」

「……嫌だ。僕は戻らない」

「何故ですか」

「何故って、あそこに戻ったら僕はまた一人ぼっちじゃないか」

「大勢の神官達が神子さまを支えますよ」

「そうじゃない。神官達は、僕と話もしてくれないじゃないか」

「当然です。貴方は、神子さまなのですよ」

「……」

「それにここに留まってどうするのでしょうか。ここにいれば、貴方はいずれ弱って死んでしまいますよ。お分かりになっていきますよね？」

神官の言葉に驚いたのは私だった。フロックスが死ぬ？ それはどういう事なのか。

神官に説明を求めると、神子は特殊な食べ物を摂取しないと次第に弱っていき、最終的には死に至るといった。

なんとという事だ。私と共に過ごす事こそが彼には命を縮める毒だったというのか。

どうすれば彼がここで暮らせるのか問うと、機密事項だから教えられないと突っぱねられた。神子の延命に必要なそれが何なのか知られてしまえば、それを断つ事で神子を死に至らしめることもできてしまうからだ。

「それに、神子さま。あと一週間で儀式の日です。貴方さまはそれがどういう意味なのか、よくご存じてしよ  
う」

「……」

「フロックスが暗い顔をする。それを追いつめたのは神官の一言だった。彼を、殺すつもりですか？」

【続きは本編で】

【奥付】

タイトル・世界の終わりと君の終わりが始まる時に・サンプル

著者・咲良椿姫

サークル・Whimsically.

シリーズ・世界の終わりと君の終わりが始まる時に

発行日・二〇二二年一月十六日 第六回文学フリマ京都

印刷所・プリントオン様

メールアドレス・[ciel66918@yahoo.co.jp](mailto:ciel66918@yahoo.co.jp)

Twitter・[@Nstda\\_Vitte](https://twitter.com/Nstda_Vitte)

HP・[Whimsically.](http://Whimsically.)

<https://whim.jp.net/>

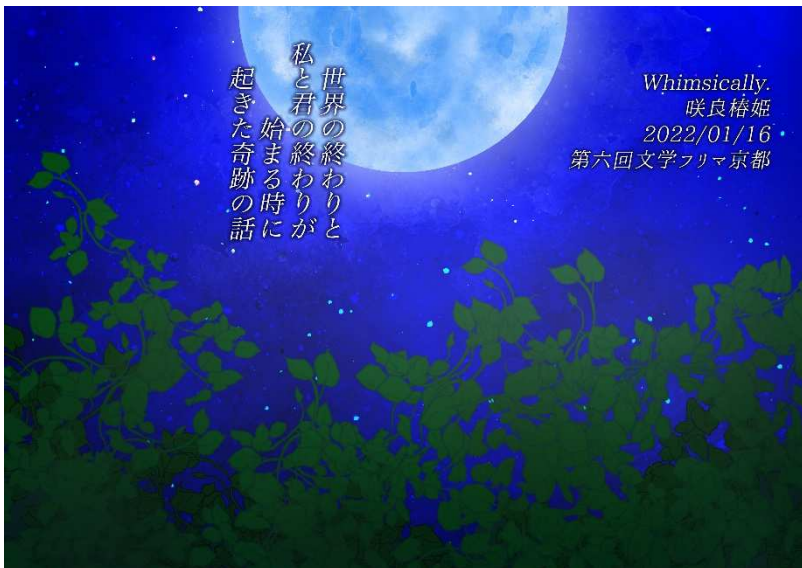
本書の無断転載・複製、オークション・フリマサイトなどでの転売は固く禁止致します。



スカレットの決意

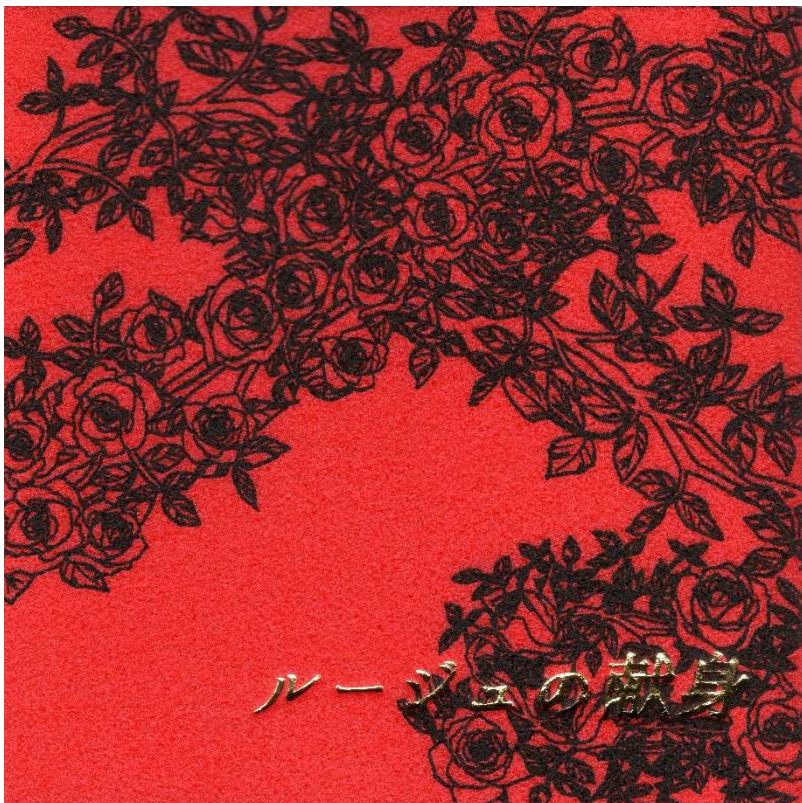
<https://bookwalker.jp/de7d99f4ed-64ed-4612-9e48-6c8e43429345/>





私と君の終わりと  
世界の終わりが  
始まる時に  
起きた奇跡の話

Whimsically.  
咲良椿姫  
2022/01/16  
第六回文学フリマ京都



ルーツェの献身

# ルージュの献身



世界には魔素と呼ばれる魔法のもとになる物質が充満していた。その魔素を効率よく取り込み体内に溜めて強大な魔法を使う事のできる一族モナルダ。その中でもトップクラスの魔女ルージュは一人の少女「エリカ」と出会った。これはこの二人が始めた物語――。

世の中には白銀の髪に漆黒の瞳を持つアクロアイトという一族がいた。彼らはその美しさから一部の富裕層にコレクションとして集められていた。

しかし、彼らはアクロアイトの一族が住むネフロライトという植物の覆い茂る森から出るとすぐに死んでしまうのだ。

それはなぜなのか。

その理由は魔素が彼らに取っては毒に等しいからだ。ネフロライトは魔素を吸収する性質を持つ。だからこそ、ネフロライトが覆い尽くしているために極端に魔素の少ない彼らの住処から出てくると命が尽きてしまう。だが、それが判明したのは、彼らが狩り尽くされ絶滅に追い込まれてからだ。

魔女ルージュは現在一・二を争うくらい優秀な魔法使いだった。そんな彼女はなんでもできるが故に世界に飽いていた。そして、ふらりとだれもいない静かな場所に行き、息抜きをしていた。

とある日、街の郊外でひとりの少女が行き倒れているのを発見する。慌てて駆け寄り、抱き起こすと、まずその美貌に見惚れた。こんなに美しい人間に会ったことはなかった。そして、灰色をした髪とその美しさから、彼女がアクロアイトである事を察した。おおかたコレクションにされていた人間から逃げたか、コレクションにする為に捕獲したハンターから逃げたかだろうと、ボロボロになっていた服装から察する。

こんなに弱っている少女を元の場所には戻せない。なによりルージュ自身が戻したくないと思ってしまう。だからこそ、認識障害の魔法をかけてまで屋敷に連れ帰って治療を施した。ルージュはアクロアイトにとって魔素が毒になる事を知っていた。だから、屋敷の一部屋に魔素が入り込まないようにする魔法をかけた。このままこの部屋で療養していれば、少しずつだが回復するだろう。そして予想通り、半日ほど経った

後彼女は目を覚ました。

「ここは……？」

少女は目を覚ますと怯えた声と表情で状況を尋ねた。既にルージュにコレクションされてしまったのかと不安になったのだろう。だが、ルージュはあくまで保護しただけで、彼女の害になるような事をするつもりはない。その事を伝えようと、安心させるような声で語りかける。

「私はモナルダの魔女ルージュ。ここは私の屋敷よ。街の外れて倒れていたあなたを発見して保護させてもらったわ。安心して。あなたを悪いようにはしない。させない。この部屋には魔素が入らないよう魔法をかけてあるから、ここで療養すれば少しづつ体調も良くなると思うわ」

「そう……なんでですか。ありがとうございます。……あ、わたしはエリカと言います」

「エリカね。どこが悪い所はない？」

「少し体が重いのと手足に軽い痺れがありますが、呼吸は楽になりました」

「それは良かったわ。体に取り込まれてしまった魔素が排出されれば体調はよくなるはずよ」

「そうですね。ありがとうございます」

「そうして嬉しそうにはかむエリカの微笑みに、ルージュは一目で彼女を愛してしまった。

このまま、この部屋でだけ生きていくなんて飼育もいとところだ。エリカには笑って楽しく幸せに生きて欲しい。

そう思ったルージュは自身の持つ土地の中で最も人里離れた場所を選び、一晚にしてエリカのための国を作り上げた。

外界と遮断するドームに魔素を吸収するネフロライトを群生させ、魔素を一切含まない空間を作る。更に、ドームの中でだけで生きていけるようにシステムを組み上げる。

そして、エリカが独りにならないように、他のアクロアイト達も集めていく。

そう時間もかける事なく噂は広まり、偉大な魔女ルージュの名は、美しさに目が眩んだアクロアイトコレ

クターとして名声も地に落ちた。しかし、そんなものを気にするようなルージユではなかった。彼女はエリカさえ幸せであればそれでよかったのだから。

【続きは本編で】



【奥付】

タイトル・ルージュの献身・サンプル

著者・咲良椿姫

サークル・Whimsically.

シリーズ・世界の終わりと君の終わりが始まる時に

発行日・二〇二二年一月十六日 第六回文学フリマ京都

印刷所・プリントオン様

メールアドレス・[ciel06918@yahoo.co.jp](mailto:ciel06918@yahoo.co.jp)

Twitter・[@Nstda\\_Vitte](https://twitter.com/Nstda_Vitte)

HP・Whimsically.

<https://whim.jp.net/>

本書の無断転載・複製、オークション・フリマサイトなどでの転売は固く禁止致します。